

医療ルネサンス

No.6632

がん治療の明日

5/5

他の遺伝病の遺伝子発見

遺伝子検査でがんの原因となる遺伝子変異を探り、治療に生かすがんゲノム医療。その検査の方法によっては、がん以外の病気を引き起こす遺伝子変異が見つかることもある。

静岡県立静岡がんセンターは臨床研究として、がん以外の変異も調べ、希望する患者に伝えている。

「心臓病に関係する遺伝子変異がありますね」

「時々、胸が痛むことがあったんです。それを聞いて納得しました」

同センターに設けられた遺伝外来。患者とカウンセラーの間では、こんな会話が交わされている。

この研究の対象になるのは、がんの進行度が比較的早期で、手術できる段階の患者。摘出した臓器の一部を遺伝子検査に使う。患者に知らせる情報は、遺伝性がんや家族性の不整脈、心

筋症など35の遺伝病にかかわる遺伝子の変異。米国の学会が作成した基準を参考に選んでいる。

特定の病気を発症しやすい遺伝子変異があるとわかっていれば、予防や早期発見につながるメリットがある。一方で、変異を知ること、発病や差別への不安

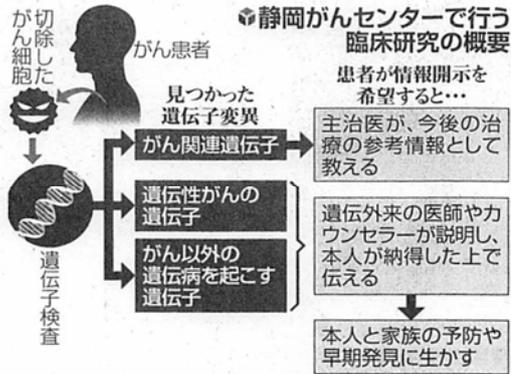
を抱えることにもなりかねない。

遺伝カウンセラーの堀内泰江さんは「遺伝病の遺伝子変異は、本人だけの問題ではなく家族や親戚にも影響する。いったん知らせてしまつと元には戻れないため、情報提供は慎重にしなければならぬ」と話す。

同センター

ではカウンセラーが「家族のね、何度も意識を確認した上で告知することもある。患者の体調や精神状態は、患者や家族の価値観、人生観にもかわる。それを医療現場でどう尊重し、治療を進めるか。それは、ゲノム医療の進展とともに、新たに突きつけられた課題といえる。」

静岡がんセンターで行う臨床研究の概要



「親戚にがんが多いと思つてた。遺伝の可能性があるのなら、娘たちのためにも知っておきたい」

告知を希望した患者は、このように話した。しかし、逆の反応を示すケースもあった。

「がんと聞いて大変なのに、これ以上、嫌なことは聞きたくない」

実際に遺伝病の遺伝子が見つかったものの、患者本人が告知を拒み、「家族のために伝えたほうがよいのだが」と医療者側が悩むこともあった。

遺伝情報を知るかどうかは、患者や家族の価値観、人生観にもかわる。それを医療現場でどう尊重し、治療を進めるか。それは、ゲノム医療の進展とともに、新たに突きつけられた課題といえる。

(加納昭彦、森井雄一)
今年6月まで
でに3440
贈る思い」です)

連載「医療ルネサンス」は、月曜日から金曜日の週5回の掲載です